

今年度の関東歴史教育研究協議会は茨城県並木中等教育学校を開催校に11月17日に行われた。開催校の中島校長はアクティブ・ラーニング（AL）で有名な方らしく、校長と、その仲間によるまさしくALの研究会であった。結城第一高校の棚谷克彦先生の報告から始まった。教員向けポータルサイト「findアクティブラーナー」で授業が取り上げられている、ALの世界で有名な先生だそう。彼は、自然体験プログラムの手法を取り入れて、生徒を常に活動させ、思考させる授業を目指しているそう。時間を細かく区切って、小さなプログラムをどんどんやらせていた。例えば、最初の1分間、全員で音読、次の3分間はそれぞれ大切だと思う箇所にマーカーを引く。ペアで問題を出しあう。講義もKP法と呼ばれるあらかじめ重要事項を書いた紙を黒板に貼って説明する方法で、要点だけ説明して数分で終わらせる。様々な小道具も使い、生徒があきずに活動するための工夫が伺えた。

次は、水海道第二高等学校の稲毛田一輝先生であった。様々な授業方法を研究されていることが伺える授業実践であった。中島校長が発案した、80字以内で、2つの文を接続詞でつないで書くことで文章力、論理力などを鍛えるR80、上述のKP法、ルーブリックなど、知ってはいるが実践の難しい方法を行っていた。特に観点ごとに文章で生徒に評価規準を示す方法であるルーブリックをかなり本格的に行っていたように感じた。論述問題を毎回課し、問題ごとにルーブリックを作成していた。

高校教員の最後は、笠間高校の佐藤悠人先生であった。防災教育と歴史総合とALを組み合わせた授業実践の報告を行った。具体的には、明治中期の濃尾地震、大正中期の関東大震災、昭和戦前の三河地震の3つの地震について、歴史背景を踏まえて、災害対応、復興策の変化を比較し、災害が防災政策に与えた影響を踏まえ、その成果と防災・減災に関わる現代的な課題を考察するという授業であった。授業の方法論的には他の授業も特色あるものであったが、内容に関しては、現代につながる最も興味深い授業であった。

高校教員の授業実践報告の後は、講演会であった。講演者はご存知の先生もおおいと思うが、産能大学の皆川雅樹先生であった。『歴史教育と歴史学の関係ー「総合」「探究」する歴史とは？ー』と題された内容であった。皆川先生の講演は、新科目「歴史総合」等の実践で求められていることが本当に実現可能なのかということに向き合った内容であった。私が印象に残ったのは2点である。1つは、探究科目で教える量が変わっていない中で、求められるような「意欲」を高めることは可能なのか？もう1つは生徒に心からの「問い」をたてさせることが果たして出来るのかという問を考察する内容だった。「探究」し、常に「問い」を立ててきた人類の歴史を学ぶ必要があるのかもしれない！？という話があり、人類がどの様な問に向き合ってきたかを学ぶのも面白いと感じた。

最後は、中島博司校長自らの講演であった。中島校長は、まさしくALの伝道師といった感じで様々なALの方法を生み出して、講演を行っているそう。言葉に強いこだわりを持っているようで、先述した「R80」、授業の中でどれくらいALを取り入れたかを示す「AL指数」、学年を超えて学びあう「TO学習」といった方法を生み出している。新学習指導要領には載らなかったが、アクティブ・ラーニングという言葉に強さがあるから使っているそう。ALをどう広めるかを徹底する姿勢は、本気で教育を変えていこうとする迫力を感じた。

以上、盛りだくさんの内容であった。皆川先生の講演にあったように、生徒が自発的に問を考え歴史学習に取り組むようになれば素晴らしいと思う。それが出来るようになるにはどうしたらいいか、これからも考えていくことが必要だろうと思う1日であった。